

## 地域貢献を目標としたチーム形成と活動内容・範囲・程度の評価

眼科 山田 潤

地域貢献は大学に求められており、国家的な支援も始まった。本学でも重要な位置づけである。1) 地域に貢献でき 2) 地域住民に分かりやすい内容で 3) 論文などの研究成果に結びつき 4) 大学や附属病院の発展に貢献出来る、4 点を満たす課題の創出を試み、本発表を通じて学長から一般職員までの期待度が高い研究を今後発展させる。提唱案を列記する。

A) 中高齢者の健康維持を目的としたアンチエイジング活動：大学附属病院が京都府下で初めての抗加齢医学会認定施設であることを前面に押し出し、a) 足首関節計測計を用いた転倒予防に関する啓蒙活動とスポーツリハビリ効果を提供する。b) アンチエイジング食などを用いた健康管理教育を行い、地域コミュニティの活性化を試みる。c) 加齢に伴う眼疾患の早期発見と予防を地域に広める。d) アンチエイジング外来を通じて各診療科を活性化する。

B) 保育施設の作成により地域への貢献と、女性職員の勤務状況改善を試みる。

南丹市市民福祉部保健医療課との議論も加味して、このたたき台を遂行しようとする活気ある研究代表者を検索中である。

## 地域に根ざした健康予防（治未病）・医療拠点の 大学となる試みと実働 —附属鍼灸センターと病院との連携の調査—

和辻 直<sup>1)</sup>，関 真亮<sup>1)</sup>，日野 ころろ<sup>1)</sup>，  
篠原 昭二<sup>1)</sup>，神山 順<sup>2)</sup>，糸井 啓純<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 基礎鍼灸学講座，<sup>2)</sup> 外科学講座

### 【はじめに】

日本は急速な高齢化に伴い、国民は健康に対する関心が高まっている。本学では、このニーズに応えられる地域に根ざした健康予防（治未病）・医療拠点となるためのシステム作りが必要となっている。これまで附属鍼灸センターと病院は連携されてきた。今後、この連携がより有機的に連携し、地域に根ざした施設となるためには活用状況を把握し、来院患者の考えを把握するための調査が必要である。その一つの試みとして附属鍼灸センターの患者を対象に、附属病院との併用状況を調査することにした。

### 【方法】

調査手順は、1) 本研究の主旨にあった調査票を独自に作成した。2) 本研究の主旨を理解した調査員が、附属鍼灸センターの来院患者さんに本調査の目的や主旨を説明して、本調査の同意を得た患者さんに待合室にてアンケート調査票を答えてもらう。

### 【結果】

調査票は、附属鍼灸センターの来院の切欠や来院の選択理由、センター来院時の併用する施設、来院の交通手段、病院の併設の良さなどを尋ねるように作成した。なお調査の実施はこれからである。